



小説問題下書

れい かん しょう にん

しょう せつ
小説

靈感商人

下

はく りゅう じん

白龍 仁

小説 靈感商人(下)

昭和62年 9 月10日 初版発行

定価 680 円

著 者 はく 龍 りゅう じん 仁

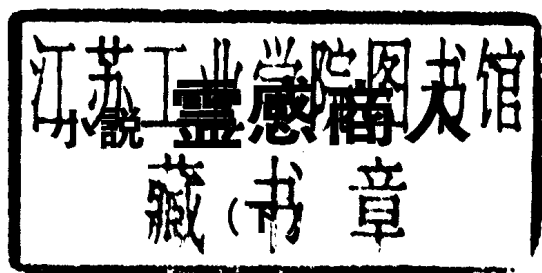
印刷製本 (株)誠宏印刷・和興堂(株)

発行所

東京都千代田区神田神保町 1-47 電話(03)233-3241

出版研 (株)出版科学総合研究所

乱丁本・落丁本は本社でお取替えいたします。© Jin Hakuryu 1987
ISBN4-87969-027-9 C0093 ¥680E



下巻目次

七章 集金論理 5

八章 迷彩教義 46

九章 泣訴の行 87

十章 教団オルグ 119

十一章 仮面の涙 147

十二章 精舎建立 181

終章 美談伝説 226

上巻目次

一章	倒産非情	四章	偽神の誕生
二章	焦燥の日々	五章	野望の布石
三章	教祖研究	六章	泣き地藏

七章 集金論理

1

「会ってもらいたい人がいるんだけど、明日の土曜日、夕方時間をあけてくれませんか」

波村が新谷の居室をのぞいて言った。その日の人生相談がすべて終り、新谷は法衣を脱いでセーターに着がえていた。脱いだ法衣を理恵は壁に掛けていた。波村はその理恵から視線をそらした。

「ビールを飲みませんか」

新谷が誘うと、波村は再び理恵にちらと視線を走

らせ、いや結構ですと固い表情で断った。

「さあさあ、波村先生どうぞ……私はこれで失礼しますから」

如才なく理恵は言つて台所に立った。テーブルの上にグラスを二つ並べた。台所で葱を刻む音がしたと思うと、食卓の上にコンロと鍋が運ばれた。鰯の入った湯豆腐であった。それに野沢菜の漬け物とほうれん草のおひたし、わかめの酢の物が並んだ。

理恵は「失礼します」と入口に膝をついてから「間もなく御飯が炊き上がると思います」と言い残して帰っていった。

理恵が帰つたのを見すまして、波村はテーブルについた。

「お邪魔をしましたね」

波村はビールの栓を開けながら言った。

「いや、彼女は今日は用事があるそうだ。ちょうどよかった……後で波村さんに電話して来てもらおうと思つていたんです」

二人は目の高さにグラスを上げた。

「明日、私がお目にかかるという人はどなたですか？」

「竹村円空のゴーストライターです」

「えっ？……これは驚きましたね」

新谷が少し大げさに驚いてみせると、波村は少し得意そうに頬笑んだ。

「私も、いろいろなライターに当たってみたんですが、何しろ宗教の世界は特殊ですからね。これは文章力だけではどうにもならない」

「そうでしょうね」

「いろいろな人に宗教関係のライターを紹介してくれて頼んでいたのですが、紹介されて来た一人に彼がまじっていました」

「しかし、竹村円空は年に三回ぐらい出版しているでしょう？そのゴーストライター忙しいんじゃないですか？」

「もちろん、竹村の著書だけで手いっぱいでしょう。他にフリーのコピライターもしているというし……」

「とてもこちらまで手が回らないんじゃないですか？」

「そこなんですがね」と、波村は二本目のビールの栓を開けながら、思案するように小刻みに頷いて言葉を続けた。

「何人かのライターに会ってみましたけど、この人なら、と思うような人は、宗教評論家とか、多少知名度がある人で、心おきなくゴーストを頼めるという人ではなかった」

「先刻も波村さんが言ってたけど、確かに宗教の世界は特殊な知識が必要だし、取材さえすればどんなライターでも書けるというものではないかもしれないせんね……」

「そこで私は、いっそのこと、竹村円空のゴーストライターを引き抜いてしまえと考えたんです」

「引き抜く？そんなことができますかね」

「できるでしょうね」

至極当然という感じで、鸚鵡返しに波村は答えた。
「その気になれば、どんな人間だって引き抜くこと

ができますよ。ただし、その人間が現状に不満を持つていふという前提が必要ですがね……後は金の力だけです」

「竹村円空のゴーストライターは現状に不満を持っていますか」

「持つていふようですね。持つていなければ私に会つたりしないでしょう……」

「不満を持つていたんじゃない原稿は書けないと思うけど……ところでどんな不満なんです？」

「先方もはつきりとは言わないが、竹村円空に正当な評価を受けていないと本人は思つていふようですね」

「金の面で……」

「いや、金というより、感謝の心というか、精神的な面でもっと自分を大事にしてもらいたという……」

「意外に幼児的な方ですね」

二人はそこで声をたてて笑つた。

「何しろ、四十過ぎているのに文学青年的な男だから……」

「……」

「例えば具体的にどんな不満かしら？」

「本人にしてみると、現在の竹村円空をつくり上げたのは自分だと思つていふ……」

「実際のところはどうかだろうか？」

「本人が考へていふ程ではないだろうが、まあ功績はあると言つていいでしょう。何しろ教団が一举に大きくなつたのは著書がベストセラーになつたお陰だから……」

「それなら、竹村の方にも感謝の心があつてしかるべきだが……」

「まあ、竹村円空は、そのライ터를なめていふ人でしょうね。何でも結構高い原稿料を払つていふという噂だから、金さえ与えておけば、それが感謝の心と考へていふのかもしれないね」

「確かにそういう考へ方もあるけど……」

「そうなんです。金をたっぷり与えておいて文句あるか……というやり方もある。しかし中途半端の金じゃそうはいかない」

「竹村の出している原稿料は中途半端というところ？」

新谷は笑いながら質問した。

「普通原稿料なら高い方かもしれませんが。何しろ一冊二百万円だというから……」

「一冊二百万円の原稿料というのは高額なんですか？」

「発行部数にもよるが、無名のライターが一冊の本を書いて貰う原稿料としては、まあまあでしょうな。しかし、自分の影武者になって全面的に忠誠を誓えという程には大きいとは言えませんな」

「そういうものですか……」

「特に竹村円空の場合は、自分には思想も文才も何もない。すべてゴーストまかせ。それに加えて最初に出版した『八大龍王大予言』と『愛と生命の守護神』はベストセラーになって、ゴーストライターに支払った原稿料の十倍以上の金が印税として出版社から竹村に入ってきている筈だ……そして何よりも、教勢拡大の発火点になった。これだけでもゴースト

ライター様さまですよ」

「印税は竹村に入ったの？」

「ライターの話によるとどうもそのようすな」

「支払った原稿料より印税収入の方が多いとなると、竹村氏はライターのお陰で儲かった事になる……」

「そうです。ライターにしてみると金銭的にも割切れないものがあるのに加えて、竹村はゴーストの扱い方を入りの業者並みにしているらしいんです」

「業者並み？」

「宴会場で教団幹部の下座に座らされた事をそのライターはカッカッしていた」

波村は笑った。

「でも、そのゴーストもおとな気がないね。竹村さんも竹村さんだけ……」

新谷も笑った。

「もの書きというのは、有名無名に限らずプライドが高い。特に、竹村を有名にし、教団を不動のものにしたのは自分だとライターは思っている。竹村は、自分が有名だから本が売れたと思っている……。竹

村はライターに仕事を与えているとしか考えていない」

「これじゃ噛み合いませんね」

「そう、噛み合わない……それでライターには不満がつのるわけです」

「それにしても、竹村氏は人間の機微をつかむのが巧^{うま}そうに見えるけど……分らないものですね」

「そこですすよ管長……人間は、自分が成り上がった、取り巻きにチヤホヤされだすと、自分が見えなくなる。自分の力を過信し、相手の能力や心が見えなくなってくる……すぐれた中小企業の社長も、少し金が儲かってくると馬鹿になるのは、そのためです」

「そこらあたりが人間の限界ですか……」

「そうです」

と、思わず相づちを打ったが、波村は、「いや、人間の限界という事ではないでしょうな。」

どんなに出世しても、金が儲かっても、自分を失わない人もいる……」

と、言い直した。そして続けた。

「まあ、大々くなる会社、ちんまりと固まってしまいう会社の違いですか……」

「竹村さんがそれほど能力のあるゴーストに対し、扱いが正当でないということには他に何か理由があるかもしれませんが……傍^{はた}で考える程ライターに能力がないとか……」

「しかし、私は今度五冊程読んでみました。なかなかのものです。私は、ライターが竹村氏をのし上げた功績を認めますね」

波村は断言した。

「波村さんがそう言うのなら間違いありませんね。それにしても、それ程大事な人間に礼をつくさないというのは、竹村氏の人心掌握も大したことはありませんね……」

「ライターと会ってみて、もし管長がよかったら、その場で引っこぬきを切り出していいですか？」

「波村さんにまかせます……」

「何しろ、出版は教団拡張の重要な手段ですからね

……目的のためには、多少えげつない手を用いるのも仕方ありませんね。本当は、引っこ抜きなんかしたくない……」

「竹村さんは困るでしょうね……」

「さあ……あわてて後がまを探すでしょうけど、いるかいなか……もし、そのライターより力のない者しか見つからなかったら、この機会を逃がさずに竹村の牙城^{かじょう}に一気に迫って、こちらに信者をいただきます」

「それは楽しいですね」

「竹村は出版で教団の拡張に拍車をかけてきましたが、今後その出版ができなくなると、教団の発展は停滞するでしょうね。切り崩^{くずれ}しのチャンスですな」

波村は元出版人であり、編集者だけに、書籍の影響力を重視していた。新谷も新宗教の研究中に、出版による信者の獲得を重要な手段だと考えるようになっていた。

「竹村氏は、そのライターを、嘘でもいいからおだてたり持ち上げたりすべきでしたな」

新谷は言った。

「そうです。金銭をたっぷり与えて有無を言わせないか、それとも、金銭をそこそこにしか与えられないなら、心の方をオーバーに相手に見せる……」

「金で釣るか、ハートで釣るか……」

「それですよ。昔、私が文壇社をやめてある出版社に入った。その会社は金に徹頭徹尾^{てつとうてつび}渋い会社でね……しかし、この社長、著者や絵描きに対して、とにかくオーバーなくらいへりくだるんですね……これには驚いた」

波村は、頷くように首を上下させて言葉を続けた。「著者が私の所に訪ねて来ると必ず出てきて、くどいくらいに挨拶する。靴のチリを払いかねないくらいだ……ある時など二十二、三の若いイラストレーターが来て、雨に降られると、自分で傘をさして最寄りの駅まで送って行った。これには、そのイラストレーターは感激していたな……」

波村は高笑いした。新谷も面白いと思った。

「それで金が渋い……そのやり方で皆さん納得しま

したか？」

新谷が聞いた。

「納得しないが悪い気はしない。どうせ三流出版社で、無名の著者や絵描きしか集まって来ないから、心からもてなされていると思うと金銭を越えていい仕事をしようという気持ちになる……これが大きいね」

「なるほど、私もそうしなければなりません」

「いや、管長」と波村はあわてた。

「管長は金があるんだから渋くなる事はありませんよ。金を生かして使ってくださいよ。管長に渋くなられたらやりにくい」

そこで二人は笑った。

それから、金を生かして使うという事で、ひとしきり話に花が咲いた。

金を生かして使うという事は価値を高めて使う事だが、人間の心をつかむためには、この金の生かし方が必要だと波村は言った。

「まあ結局、どうせ金を相手に支払うなら、ありが

たいと思わせて渡すという事が生かして使う事だね」

「そうですね。同じ十万円でも、泣けてくる程にありがたいた時と、なんだこれっぽっち、馬鹿にして……と思う時がある。使い方をまちがうと、かえって逆効果になる。難しいですね……」

「人望を集めるという事は、この金の使い方が大きくものを言う……」

「竹村氏は、せっかく一冊二百万円の稿料を支払いながら、相手に不平不満を与えた……これがあの人の限界ですかね」

「まあ、そういったところでしょうな」

それから二人の話は日民党の長老で田所派の田所栄一の話に戻った。以前、波村が人心収攬しゅうらんのテクニクとして、自分の雑誌記者時代に田所から直接聞いたという話、田所の子分から間接的に聞いたという田所にまつわる話を新谷に語った事がある。その話を波村から聞いた時、新谷は感銘を受けた。

「金の使い方という点では、田所の右に出る者はい

ないだろうね。まあ名手と言っている。人は、金というところをテクニクにばかり目を向けるが、使いた方が本当は大切なんだよね」

新谷の預金通帳には、今、五千万円を少し越えた数字が記入されている。年商三億円近い会社を経営していた時でも、五千万円の数字が預金通帳にまるまる残っていた事はなかった。仮にあつても、それは、借金の担保であり、新谷が自由にできる金ではなかった。預金通帳の三倍から五倍の借金でいつも苦しんでいた新谷には、預金通帳の金に対し自分の金という実感はなかった。今、新谷は金を貯める事に異常な興味を覚え始めていた。しかし、波村との会話で、金の亡者になってはいけないと自らの心に語り聞かせた。

翌日、夕刻の六時半、赤坂の料亭で新谷と波村は竹村円空のゴーストライターだという野口恵三と会った。

野口は少し固くなって、肩を怒らせていた。青臭

い構えがあつた。軽く見たら承知しないぞといううな押しつけがましい尊大さがあつた。

目はきらきらと少年のように光っていたが蓬髪は不潔であつた。年は四十三、四ということであるが、年よりは幾分若く見えた。

新谷と波村は、野口を上座に座らせた。

珍しく、波村が野口を先生と呼んだ。文壇の中堅作家さえ、さんや君づけで呼んでいる波村が、野口を先生と呼ぶのは、もちろん彼をくすぐるためである。

新谷も両手をついて「よろしく」と挨拶した。こちらの低姿勢が分かると、やつと野口の構えがとれた。単純なものだな、と新谷は思った。この程度のことでは相手が気分よくなり、いい原稿を書いてくれるならお安いものだと思つた。

「うけ承りますと、先生は竹村円空先生の御著書を代筆なさっているそうでございますが……」

新谷は、慇懃に言つた。

「それについては、私たちゴーストの仁義がござい

まして、はっきりとお答えできませんね。私の口からは……」

「なる程、先生はゴーストとしての自分の本分というか、きちんと守っているわけですね……なかなかできないことだ……」

波村が野口を持ち上げた。新谷は、仁義とかモラルが、ゴーストライターには、どうして必要なのか分からなかったが、話を続けているうちにやっと理解した。著者の名誉のために、代筆者が自分で代筆したことについて名乗りをあげたりしないということのようであった。

新谷は経営者として生きてきた時間が長いために、その世界にほとんどとく、代筆者がいるとかいないとかということや、それを隠すとか、表に出すということなどについて、それほど重きを置いて考えてはいなかった。新谷にはデリカシーが不足しているのかもしれない。

しかし、酔いが回るにつれ、野口のゴーストライターとしての仁義も怪しくなってきた。

「竹村さんは、私を教団幹部の誰一人にも紹介しようとしません。これは私にとっては不快きではありません……」

「ほう。どうして紹介しないんですか？」

「今までの著書は、自分が全部書いたと側近にさえ言いふらしている……それで私を紹介するとその嘘がバレてしまうからです」

「それはまた不思議な神経ですな。でも、あれだけすばらしい原稿を、竹村さんが自分で書いたとは教団幹部は誰も信じていないでしょう」

波村はなかなか上手に野口をくすぐっていた。

「そりゃあ信じませんよ」

と、得意そうに微笑し「そこがあの人の心の狭いところです」と、野口は少し軽蔑の感じを込めて言った。

野口はすっかり構えを解き、尊大さをなくしていた。無邪気なおとなという感じであった。むしろ頼りないくらいのものであった。これでいい原稿が書けるのだろうか。新谷は考えた程である。この稚氣

愛すべき男を掌握できないようでは竹村円空という人物も大した男ではないと思った。

「ところで野口先生、私どもの管長のために一つ、原稿をお願いできないでしょうか……」

波村は、いよいよ本題に入っていった。

今まで無邪気な饒舌をふりまいていた野口は、急に醒めた顔になった。少し構えが戻ってきた。

「竹村さんの原稿を年に三本程書いていますので、実際のところは、手いっぱいなんですけどね……」

野口は、気を持たせるような、ためらうような、どっちつかずの答え方をした。

「それはそうでしょう。野口先生のような才能のある方は、傍で放つて置かない……PRコピーのお仕事もお忙しいんでしょう？」

波村は、野口の気を引くような言い方に乗っていた。それが波村と新谷の作戦であった。

「ええ、嫌になる程忙しいですね……」

野口は多忙を強調した。

「どうです？野口先生……いっそのこと、全部お仕

事をやめていただけませんか？」

「やめる？ やめてどうするんですか」

「当教団の管長の原稿だけを書いていただくというのはいかがですか？」

「管長の原稿だけをね……なる程」

「失礼でございますが、PR関係の方の仕事は年収でいか程でしょうか？」

「二百万円前後でしょうね……」

すかさず答えたところを見ると、あまりさばを読んでいる様子がなかった。だが、野口は、波村が口を開く前につけ加えた。

「他に週刊誌や雑文の仕事などで二百万近くありますかね……」

この言い方は齒切れが悪く、怪しい感じがしたが、波村は微笑みながら頷いた。

「そうでしょうとも。そうしますと、竹村先生のゴースト料を含めて先生の年収は約一千万円と考えてよろしいわけですね……」

「まあ、そうですが、一千万円でしたら、結局今ま

でと同じ収入という事になりますね」

少し、興醒めた顔で野口は呟いた。

「まさか、私共の専属で原稿を書いていただくのに今までの収入と同じというわけにはまいらんでしよう。専属料を出ささせていただきます」

「専属料？」

心なしか、野口の目が丸くなったように新谷には見えた。波村は追いつきをかけた。

「どうですか？専属料は一年契約五百万円という線です……」

野口は、黙々と杯を口に運んでいた。心の中に小さな波紋が起きているのは明らかであった。杯を持つ手も気ぜわしく、少し震えているように見えた。

「契約は一年限りですか？」

野口の声は上ずっている。彼は悪人ではないと新谷は睨んだ。野口の間に波村が答えた。

「もちろんお互いにプラスになると思えば一年後に契約を更新すればいいでしょう。当然ですが、契約金は新に一年分支払います」

気の毒なくらい野口の頬は強張って見えた。

「私の方の条件は？」

「当教団の管長の本を年に四冊書いてください。一冊二百五十万円お支払いいたします。これで一年間一千万円になるでしょう……他の条件としては、契約期間中は、当教団以外の仕事は一切しないでください」

「契約金の授受は？」

「契約日に半金、一冊目の原稿を脱稿し、こちらにいただいた時に残金としましょう。原稿料の支払いは、脱稿時の月末に一括払いとしますが、中間に百枚以上書き上がっていましたら、その分をご提示いただければ、百万円を限度に支払います」

大手、中小の出版社を渡り歩いてきた波村は、さすがにどむところなく細かい条件を野口に告げた。

「野口先生いかがでしょう……」

波村は野口を見ずえるようにして言った。野口は、すっかり本性をさらけ出し、気弱そうに目をしばたいた。文章を書く人間らしく、本当は神経が細い